東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（一）

―昭和11年版『和漢書別置本目録　未定稿』刊行とその周辺―

大　原　理　恵

はじめに―記念と情報―

東北大学附属図書館では、平成17年度に貴重図書目録和漢書篇を刊行した。東北大学において事実上最初に選定された貴重図書は、開学記念に展示された典籍である。その目録が附属図書館貴重図書目録の濫觴といえる。百年近い歳月の経過は「貴重書」と称されるものの対象も性質をも変えて行く。古典籍の貴重図書を選定することにいかなる意義があるのか、古典籍であることがすでに相応の貴重性を帯びる時代においては、問い直されなくてはならないであろう。大学における貴重図書は床の間の飾りではなく研究資料であるが、なお大学の飾りともされるものである。

平成17年度刊行の貴重図書目録は、昭和36年度刊行『東北大学附属図書館　別置本目録　増訂稿』をさらに増補改訂したものである。当時は現在の貴重図書に相当するものを「別置本」と称していた。三十六年度版目録は、昭和11年刊行『和漢書別置本目録　未定稿』の増補改訂版であり、その体裁も昭和十一年版目録を踏襲する。したがって昭和十一年版目録がその後の貴重図書目録の基本と位置づけられる。昭和11年は東北帝国大学開学二十五周年記念式典が行われた年であり、附属図書館では貴重図書の展観を行った。『和漢書別置本目録』の刊行には記念の意味も込められていたであろう。一方で蔵書全体の目録刊行が困難な時代、貴重図書目録には先ず最も重要な典籍の情報を広く伝える役割が期待される。

平成17年度『貴重図書目録　和漢書篇』刊行の際、従来の貴重図書選定・目録編纂過程について整理すべきものと考えた。東北大学附属図書館広報誌『木這子』にその報告を連載する計画で一部を掲載した[1]が、『木這子』が編集方針を変更し同誌への掲載は困難になった。本稿は、既に『木這子』に発表した報告の継続を打ち切り新たに書き直すものであるが、一部重複を含むことをお断りしておく。また、今回の報告は、目録編纂の経緯や背景を主な対象とし、目録の内容には検討を加えない。

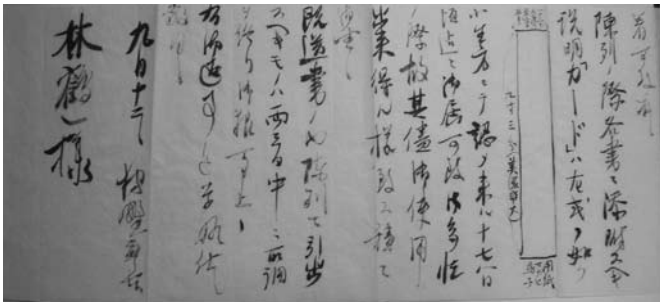
本稿では、日常的に廃棄・消去の可能性のある資料を多く用いている。古典籍、殊に貴重図書は、その本質から廃棄を想定していない。対して典籍に添付された札、目録カードに鉛筆で記されたメモなどは、一時的な利用を目的とする。作成者の意図が明確ではない、保管も偶然に左右される不安定な資料による記述は問題を含むはずであるが、目録の改訂に務めた人々の努力を尊重する意味からも、それらの「痕跡的」資料を示すこととした。

東北帝国大学草創期の典籍をめぐる状況

大正２年９月東北帝国大学開学記念に展示された典籍の目録が、『東北帝国大学所蔵狩野氏旧蔵書仮目録』（東北帝国大学図書館　大正３年）収載の「貴重書之一部」である。この目録には「本学開学式ノ際陳列ノ為送本ノモノ」と注記があり、開学展示にふさわしい格式が考慮されたのか古写本・古刊本・名家自筆本が中心である。明治33年12月の京都帝国大学附属図書館の創立一周年記念展覧会ではそうしたものの他に「風俗珍本類」「絵本類」「俳諧、狂歌類」なども展示[2]し

ているから、少し硬いともいえる。

林鶴一（初代附属図書館長）宛狩野亨吉書簡（九月十二日付）[3]によれば、展示期日が迫っていたこともあって、狩野氏の配慮により書名等を記した紙の札を添えてこれらの書物は送られたようである。これを書物の脇におけばそのまま展示ができ、その記述をまとめれば簡略な目録もできる。



狩野亨吉氏書簡（史料館所蔵）

札[4]の仕様は書簡に図示されているが、縦「九寸三分（美濃帋大）」横「一寸一分五厘乃至二寸五分」の大きさ、「用紙マガヒ鳥子」というものである。

現在の貴重図書に概ね同様の仕様の札が挿入されているものがある。付表に「貴重書之一部」の記述と現在存在が確認された札の記述を示した。札の仕様については、厳格な判別はしておらず、開学式に作成されたものとは断定できない[5]が、札と「貴重書之一部」の記述内容はほぼ一致する。特に小谷薫（巣松・双松）の稿本と後に認定される数点を札・目録ともに塩田随斎著としているのが目につく。伊勢津藩関係として狩野氏の手元では資料が一括されていた等の事情があったかもしれない。狩野氏旧蔵書は、数度に亘り分割送付されたこと、図書整理時に分類し直したことなどが加わり、狩野氏所蔵時の書籍のまとまりは見えにくい。

目録では札にはない「写本」等の基本的記述が加えられている。また『教書草稿』から『歌道之秘書』まで、目録には殊更に「貴重」の記述が加えられている（『東北帝国大学所蔵狩野氏旧蔵書仮目録』p562上段）のはやや奇異である。札の説明的注記を目録では省略している場合がある。ただし『詢蕘齋文鈔』において「藤堂高猷」に札の「津侯」の注記が目録にないのは、このならびの資料に「小諸侯」「飯田侯」「宍戸侯」等の注記があるので、誤って脱落した可能性が考えられる。この目録の配列は、組織的とはいえないとしても、類似の資料をまとめておく傾向は認められよう。

貴重図書と「札」
（東北大学附属図書館蔵）

この目録には、誤植や脱落のほか不適切な記述も見られるが、検索の支障が考えられるもののみ注記した。「貴重書之一部」以外の現在の貴重図書で札が添付されているものがあるが、これらの札には朱の丸印がある。また、貴重図書ではない資料の札が一枚、貴重図書に挿入されていた。

ここで、『東北大学五十年史』（東北大学　昭和35年）及び「狩野文庫について」[6]村岡典嗣（昭和十二年十月）の記述を中心に、東北帝国大学草創期の典籍をめぐる動きを概観しておく。明治44年１月理科大学が設置され、明治44年６月図書館が設置されている。狩野文庫の購入交渉が整い第一次受入が開始されたのは大正元年で文庫を活用すべき文系の学部はなかった。このことを村岡は「当時本文庫の購入の如きは、思ふに最も急を要しない事業であつたらう。しかもこの事あつたが為に、今日吾人はかゝる再びと容易には得がたき貴重なる研究資源を、わが大学に有するのである。」（「狩野文庫について」[7]）と述べている。

受入態勢は整っておらず「狩野文庫はまづ仙台高等工業学校書庫の一部を借りて之に納め、

開学展示目録		函架番号（推定）	札	カード記号	備考
藏叟摘藁　五山板	一	阿五 - 九五		○	
論語集解　正平十九年	五	阿七 - 八四	正平十九年　論語集解　五	○	
歴代帝王紹運圖　五山板	一	阿五 - 九七	五山板　歴代帝王紹運圖　一	○	
景德傳燈録　貞和五年書入本江月禪師舊藏	一五	阿七 - 八三		○	
平家物語　慶長	一二	阿九 - 一三四	慶長　平家物語　一二	○	
つれ〈草　慶長板	二	阿六 - 一二三	慶長板　つれ〈草　二	○	
朱子語録類要	四	阿一一 - 一四八	朱子語録類要　四	(特)？	
本朝文粹　寛永六年	五	阿一一 - 一四六	寛永六年　本朝文粹　五	(特)？	
沙〔ママ〕法蓮華經　春日板	八	阿五 - 九二	春日板　妙法蓮華經　八	○	
李善注文選　延祐年間	三〇	阿二 - 六一		○	
墨水畫麈　川端玉章　寫本	一	伊六 - 五七〇	川端玉章　墨水畫麈　一	○	
文雅典寶　加藤櫻老　寫本	一	伊三 - 三三二	加藤櫻老　文雅典寶　一	(特)？	
廣韻　宣德十年	五	阿三 - 六三	宣德十年　廣韻　五	○	
王狀元集百家注分類東坡詩　宋板	一〇	阿二 - 五三	宋板　王狀元集百家注分類東坡詩　一〇	○	
源氏物語　寫本黒塗函入	五四	宇一 - 九四三		無	字一四 - 九四三 *
烈公書簡　徳川齊昭　桐函入	五	宇七 - 九六一		無	
華嚴經隨疏演義鈔　正慶五年	一	阿四 - 八一	正慶元年　華嚴經隨疏演義鈔　一	○	
文章達徳録	五	阿一一 - 一四七	文章達徳録　五	(特)？	
つれ〈艸　慶長	二	阿九 - 一三三	慶長　つれ〈草　二	○	
證類本草序例　慶長十七年	一	阿六 - 一二一	慶長十七年　證類本草序例　一	○	
伊勢物語　繪入　慶長十三年	二	阿五 - 一一七		○	
倭名類聚鈔　元和三年	五	阿一〇 - 一四一		(特)？	
源氏小鏡　慶長十五年	一	阿六 - 一二五	慶長十五年　源氏小鏡　一	○	
帝鑑圖説　繪入　慶長十三年	一	阿五 - 一一六	慶長十一年　帝鑑圖説「繪入」　六	○	
古文眞寶後集	二	阿六 - 一二四	古文眞寶後集　二	○	
土佐存古録　奥宮曉峯　寫本	三	阿一三 - 一八六		特？	
科戸の風　内藤恥叟寫　寫本	一	伊六 - 四二六	内藤恥叟寫　科戸之風　一	(特)？	
孟子得原　山本學半　寫本	四	伊二 - 二五三	山本學半　孟子得原　四	○	
大學問譯文　奥宮慥齋　寫本	一	阿一三 - 一八五		○	
退食閑話　茅根伯陽寫　寫本	一	伊五 - 四〇九	茅根伯陽寫　退食閑話　一	特？	
易注四種　荘司健齋　寫本	一八	伊一 - 二一七		○	周易雑註 *
周選唐賢絶句補註　大槻盤溪　寫本	三	阿一三 - 一九〇	大槻盤溪　周選唐賢絶句補註　三	○	
聖學端的　奥宮慥齋　寫本	一	阿一三 - 一八四	奥宮慥齋　聖學端的　一	？	
古文孫子正文　櫻田廸　寫本	一	阿一四 - 二〇七	櫻田廸　古文孫子正文　一	無	
西河折妄　猪飼敬所　寫本	三	伊二 - 二五五	豬飼敬所　西河折妄　三	○	
三國通覧圖説　猪飼敬所　地圖五枚説明一冊	六	伊六 - 四三六	豬飼敬所書入　三國通覧圖説　六	(特)？	
如蘭集　古賀洞庵寫本	八	阿一三 - 一九四	古賀洞庵　如蘭集　八	○	
垂加翁神説　松宮俊仍寫　寫本	一	伊六 - 四二九	松宮俊仍寫　垂加翁神説　一	(特)？	
風土記四種　山城國、常陸國、肥前國、相摸國　河村秀根寫　寫本	四	伊五 - 四〇八	河村秀根寫　風土記四種　四 「山城國一　常陸國一　肥前國一　相摸國一」	無	
論語説　高橋復齋　寫本	二	伊一 - 二二八	高橋復齋　論語説　二	特？	
隨齋文鈔　鹽田哦松　寫本	二	伊一 - 二一一		○	
律　狩谷掖齋校	四	伊五 - 四一二	狩谷掖齋校　律　四	○	
法苑珠林　至正年間	一	阿三 - 七一	至正年間　法苑珠林　一	○	
十門辨惑論　宋板一切經ノ内　紹興十八年	二	阿二 - 五二	紹興十八年　十門辨惑論　二「宋板一切經ノ内」	○	
一切經音義　三聖寺本一切經ノ内　崇寧二年	一	阿二 - 五一		○	
聖財集　延徳四年　寫本	三	阿一 - 一九	延徳四年　聖財集　三「奥書曰五世法孫恵柱写」	○	
佩觿　寫本	一	伊六 - 四三九	佩觿　※冊数記入なし	(特)？	
竹とり　繪入、寫本箱入	三	伊九 - 六一一		○	
六祖傳　天正九年　寫本	一	阿一 - 二二	天正九年　正法山六祖傳　一	○	
ふんしやう　繪入　寫本	三	伊六 - 六一七		無	
雪峰空和尚外集　貞和三年	一	阿四 - 八二	貞和三年　雪峯空和尚外集　一	○	
盂蘭盆經疏新記　永正二年	一	阿五 - 九一	永正二年　盂蘭盆經疏新記　一	○	
碧巖録　妙心寺正眼菴刊　五山板	五	阿五 - 九三	五山板　碧巖録　五「妙心寺正眼菴刊」	○	
唐賢三體詩　明應三年	一	阿五 - 九〇	明應三年　唐賢三體詩　一	○	
癡絶禪師語類　應永廿一年	二	阿五 - 八八	應永二十一年　癡絶禪師語録　二	○	
碧巖録　美濃瑞龍寺刊　五山板	五	阿五 - 九四	五山板　碧巖録　五「美濃瑞龍寺刊」	○	
藏乘法數　應永十七年	一	阿五 - 八七	應永十七年　藏乘法數　一	○	
唐賢三體詩　明應以前	三	阿五 - 九八	明應以前　唐賢三體詩　三	○	
枯崖和尚漫録　應永以前	一	阿五 - 八九	應永以前　枯崖和尚漫録　一	○	
詩稿四種　東門二、晩甘園詩稿三、晩甘園六、隨齋詩抄一六　鹽田隨齋　寫本	二七	伊一 - 二一二	塩田隨齋　詩稿四種　二七「東門詩草　二　晩甘園詩稿　三　晩甘園詩抄　六　隨齋詩抄　一六」	？	東門詩草 *
(同上)		伊一 - 二一三	(同上)	(特)？	晩甘園詩藁 *　(九冊)
(同上)		阿一四 - 二一〇	(同上)	(特)？	隨齋詩鈔 * 一六巻
毛儒乃轉り　草場佩川　寫本	一	阿一三 - 一九二	草場佩川　毛儒乃轉里　一	？	
群書雑抄　小谷雙松　寫本	三	阿一四 - 二〇二	小谷雙松　群書雑抄　三	？	
桐陽集　高橋復齋　寫本	六	伊一 - 二二五		特？	
客中日乗　鹽田哦松寫　寫本	一	伊一 - 二三七	塩田哦松寫　客中日乗　一	(特)？	
哦松輕〔ママ〕雑纂　鹽田哦松寫　寫本	七	阿一四 - 二〇八	塩田哦松　哦松軒雑纂　七	？	
隨齋詩鈔　鹽田隨齋　寫本	三	伊一 - 二一一		○	
韶妙曹溪山六祖師擅經　鎌倉時代寫本	二	阿一 - 二四		○	韶州曹溪山六祖師壇經 *
義學録　小河一敏　寫本　貴重	一	伊五 - 三七七	小河一敏　義學録　一	特？	
詩籟子日記　金山奉行　白石千別　寫本	一一	伊一 - 二二〇		特？	
琢華翁寫生摹　淺野梅堂　寫本	一	伊六 - 五六五	淺野梅堂　琢華翁寫生摹　一	○	
眼福録　淺野梅堂	七	伊六 - 五五五	淺野梅堂　眼福録　七 「梅堂ハ内匠頭ノ裔安政年間皇居御造営奉行タリ」	？	
和漢朗詠集　明應九年	一	阿一 - 三三	明應九年　和漢朗詠集　一	○	
詢蕘齋文鈔　藤堂高猷　寫本	二	伊二 - 二三八	「津侯」藤堂高猷　詢蕘齋文鈔　二	○	
三鏡堂集　小諸侯　牧野康濟　寫本	八	伊二 - 二四七	「小諸侯」牧野康濟　三鏡堂集　八	(特)？	
濱の御園記　土岐頼旨　寫本	一	伊三 - 二九五	土岐頼旨　濱の御園記　一	○	
諭卒俚言　飯田侯　堀新寶　寫本	一	伊一 - 二二一		(特)？	菅原（堀）親寶撰 *
大三川志稿　宍戸侯徳川頼寛　寫本	二	伊四 - 三五五		○	
光臺集　野宮定基寫　寫本色紙	一	伊一一 - 二九七	野宮定基寫　光臺集　一	○	
源氏物かたり註　逍遥院實隆　寫本	一	阿一 - 三四		○	
論草　延慶八年　寫本	二	阿一 - 一五		○	
法自相事　貞和五年　寫本	一	阿一 - 一六	貞和五年　法自相事　一	○	
違三難答抄　應永十四年　寫本	一	阿一 - 一七		○	
百法問答鈔　應永廿九年　寫本	一	阿一 - 一八		○	
法華音義　永正九年　寫本	一	阿一 - 二〇	永正九年　法華音義　一	○	
良將達徳鈔　古賀洞庵　寫本	一一	阿一三 - 一九六	古賀洞庵　良將達徳鈔　一一	○	
本朝麗藻　篠崎東海寫	一	伊一 - 二二三		○	

論語集註　山本北山書入　三	伊六 - 四三三	山本北山書入　論語集註　三	?※不分明	
教書草稿　權田直助　寫本　貴重　一	伊三 - 二八六	權田直助　教書草稿　一　「田中頼庸批評」	(特)?	
どゞいつ根元集　小寺玉晁　寫本　貴重　一	伊四 - 三五四		○	
編年小史　深草元政書入　三	伊五 - 四一六		特○	本朝篇年小史 *
連歌新式　遊行上人他阿尊通寫　寫本　責〔ママ〕重　一	伊五 - 四二二	遊行上人他阿尊通寫　連歌新式　一	○	
懐日記（文化四年奥州遊歴の記）　谷文晁　寫本　貴重　一	伊四 - 三五三		(特)?	
草むすび　曲亭馬琴寫　寫本　貴重　一	伊五 - 四一四	曲亭馬琴寫　草むすひ　一	○	
新古今和歌　祇園梶女寫　寫本　貴重　一	伊五 - 四一三	祇園梶女寫　新古今和歌　一	特?	
大同類聚方　齋藤彦麿寫　一	伊五 - 四一八	齋藤彦麿寫　大同類聚方　一	(特)?	
長謌玉琴　六都部是香　寫本　貴重　一	伊三 - 三〇四		(特)?	
徵古究理説　鶴峯戊申　寫本　貴重　二	伊三 - 二九三	鶴峯戊申　徵古究理説　二	?○	
讀史記　村尾元融　寫本　貴重　一	伊三 - 三〇六	村尾元融　讀史記　一	特?○	
骨董録　安積艮齋　寫本　貴重　一	阿一三 - 一八一		○	
養小録續編　羽倉簡堂　寫本　貴重　一	伊二 - 二四二		(特)?	
歌道之秘書　文明五年　寫本　貴重　一	阿一 - 三二	文明五年　歌道之秘書　一	○	
和漢朗詠集私注　天文頃　寫本　六	阿一 - 四〇	天文頃　和漢朗詠集私注　六	○	
雲妙間雨夜月　英譯付　曲亭馬琴　寫本　二	伊九 - 三三四	曲亭馬琴　雲妙間雨夜月　一 「此書英譯　A Captive of Love　彼地ニ行ハル」	○	
七草庵日記　梅之房教覺　寫本　九	伊八 - 三二八	梅之房教覺　七艸庵日記　九	(特)?	
鶩群談　觀鶩百譚初編　細井廣澤　寫本　一	伊六 - 五五一		○	
管城説郛　細井廣澤寫　寫　※「本」ナシ　一	伊六 - 五五四	細井廣澤寫　管城説郛　一	○	
字林長歌　細井廣澤　寫本　五	伊一 - 二一四	細井廣澤　字林長歌　五 「巻一刊本アリ巻二以下刊行セス」	無	
諸所經緯度及方位里程　本多利明　寫本　一	伊四 - 三六八	本多利明　諸所經緯度及方位里程　一	○	
オクタント用法記　本多利明　寫本　三	伊四 - 三六七		○	
暦草二種　貞享暦　大和七曜暦　澁川春海　寫本　二	伊四 - 三四七	澁川春海　暦草二種　二 「貞享暦　一　大和七曜暦　一」	無	貞享暦 *
(同上)	伊四 - 三四八	(同上)	?	大和七曜暦 *
北峰雜抄　山崎美成　寫本　二	伊三 - 三〇七	山崎美成　北峰雜抄　二	(特)?	
掌記　多紀桂山　寫本　三	伊四 - 三六〇		(特)?	
東園集　林東園　寫本　一一	伊二 - 二四三	林東園　東園集　一一	(特)?	
五色類纂　村田了阿　寫本　五	伊一一 - 三〇五		○	
躑躅園隨筆　石原正明　寫本　一	伊三 - 二八二		○	
三外往生傳　狩谷掖齋校　寫本　一	伊五 - 四一〇	狩谷掖齋校　三外往生傳　一	○	
拾遺往生傳　狩谷掖齋校　寫本　三	伊五 - 四一一	狩谷掖齋校　拾遺往生傳　三	○	
出石事略　鹽田隨斎　寫本　一	阿一四 - 二〇四	鹽田隨斎　出石事略　一	特?	小谷薫撰 *
木蔭のしづく　鹽田隨斎　寫本　一	阿一四 - 二〇三	鹽田隨斎　木蔭のしづく　一	?	小谷薫撰 *
荒政先後事宜議　鹽田隨斎　寫本　一	阿一四 - 二〇一	鹽田隨斎　荒政先後事宜議　一	特?	小谷薫撰 *
海防策　鹽田隨斎　寫本　一	阿一三 - 一九九		特?	小谷薫（巣松）撰 *
三十一字集　佐藤硯湖　寫本　五	阿一三 - 一九八		(特)?	
五節舞姫　齋藤彦麿寫　寫本　一	伊五 - 四一七	齋藤彦麿寫　五節舞姫　一	○	
巴陵詩文稿　藤堂巴陵　寫本　三	伊二 - 二三九	藤堂巴陵　巴陵詩文稿　三	(特)?	
類抄　高橋復齋　寫本　七	伊一 - 二二七	高橋復齋　類抄　七	(特)?	
詩草四種　漫遊詩草、龍山詩艸、小梅屋漫草、旅中稿　藤堂龍山　寫本　四	伊二 - 二四〇	藤堂龍山　詩草四種　一〔ママ〕「漫遊詩草　一　龍山詩草　一　小梅屋漫草　一　旅中稿　一」	(特)?	
外蕃通書　近藤正齋　寫本　一二	伊三 - 三四〇	近藤正齋　外蕃通書　一二	○	
倭名類聚鈔　稲葉通邦書入　寫本　四	伊五 - 四〇四		(特)?	伊五 - 四〇四は刊本
奥羽觀跡聞老志　佐久間洞巖　寫本　二〇	阿一四 - 二〇六	佐久間洞巖　奥羽觀跡聞老志　二〇	○	
詩文稿艸　小谷雙松　寫本　一八	阿一四 - 二〇五	小谷雙松　詩文稿艸　一八	(特)?	
晩翠吟社詩卷　鹽田哦松寫　寫本　三〇	阿一四 - 二〇九	塩田哦松寫　晩翠吟社詩卷　三〇	(特)?	
經解稿艸　小谷雙松　寫本　八	阿一三 - 二〇〇	小谷雙松　經解稿艸　八	○	
西國立志編　中村敬宇　寫本　四	伊四 - 三五六		○	
西洋品行論　中村敬宇　寫本　七	伊四 - 三五八		○	
自由之理　中村敬宇　寫本　六	伊四 - 三五七		○	
初祖三論　天正十八年　寫本　一	阿一 - 二三	天正十八年　初祖三論　一	○	
王陽明文録　森守命書入木版　四	伊五 - 四〇五	森守命書入　王陽明文録　四「守命會津人 此書陽明学者奥宮慥齋ノ旧蔵ニカヽル跋記アリ」	(特)?	
元服次第考　新井白石　寫本　一	阿一三 - 一八二		○	
武家系圖　林鵞峯　寫本　一	伊一一 - 二四五	林鵞峯　武家系圖　一	○	
觀瀾雜録　三宅觀　※「瀾」ナシ　一〇	伊二 - 二四八	□□觀瀾　觀瀾雜録　一〇　※□＝札破損による欠落	○	三宅緝明（觀瀾）撰 *
下學集　天文十年　寫本　一	阿一 - 三六	天文十年　下學集　一	○、	
一回違四事　永正十八年　寫本　一	阿一 - 二一	永正十八年　一回違四事　一	○	
續文獻通考　新井白石寫　寫本　一	伊五 - 四〇一	新井白石寫　續文獻通考　一	○?	
采覧異言　豬飼敬所書入　寫本　一	伊六 - 四三五	豬飼敬所書入　采覧異言　一	(特)?	
天學略名目鈔　豬飼敬所書入木版　一	伊六 - 四三七	豬飼敬所書入　天學略名目鈔　一	(特)?	
烽山日記　亀井昭陽　男鐵筆寫　寫本　二	阿一三 - 一九一		○	
古今究原　山本北山　寫本　二〔ママ〕	伊二 - 二五一		○	
徂來〔ママ〕集　荻生徂來〔ママ〕　寫本　二	伊五 - 四二四		○	
對禮餘藻　古賀精里　寫本　三	阿一三 - 一九三		○	
學半隨筆　山本學半　寫本　一	伊二 - 二五二	山本學半　學半隨筆　一	(特)?	
京房易傳解　山本北山　寫本　一	伊二 - 二五〇		(特)?	
韓非子解詁　津田鳳卿　木版　九	伊五 - 四二五		○	
類聚國史第廿五　藤原時代寫本　壬生官務家舊藏箱入　一	阿八 - 二		○	
史記孝文本紀　延久五年　文章生大江家國寫　狩谷掖齋舊藏箱入　一	阿八 - 一		○	
山谷詩集注　足利時代　寫本　箱入　一〇	阿八 - 四一		無	
徧無爲草稿　寫本　箱入　一	伊八 - 二九九		○	天躰靈魂圖説 * か
君臺觀左右帳記　永録〔ママ〕二年　寫本　箱入　一	阿八 - 三七	永祿二年　君臺觀左右帳記　一	○	
聖徳太子傳暦　應仁二〔ママ〕年　寫本　箱入　二	阿八 - 三		○	
切紙十九種　曲直瀬道三　寫本　一箱	阿八 - 四五	曲直瀬道三　切紙十九種　一箱	○	
	阿六 - 一二〇	慶長十六年　阿毘達磨倶舎論頌釋疏　二八		札に朱の丸印あり
	阿八 - 三一	正長二年　山谷刀筆　五		札に朱の丸印あり
	阿一一 - 一五三	寛永　象山先生全集　二〇		札に朱の丸印あり
	伊三 - 二九六	丹羽桃麿　雑々集　四		札に朱の丸印あり
	伊三 - 三〇一	松本弘蔭　松葉集　六 ※鉛筆で「五　一冊欽　要調査」とあり		札に朱の丸印あり
	伊五 - 三七二	松平忠朋　拙爺隨筆　一九		札に朱の丸印あり
	伊四 - 三四四	多紀菌庭　診病奇侯　一		札に朱の丸印あり
	伊四 - 三四六	司馬全交　言葉之塵　一		札に朱の丸印あり
		岩本五一　燕石十種　八五		札に朱の丸印あり

付表

※カード記号　(特) は丸で囲んだ「特」の字
　　「無」は記入のないもの
※備考欄 * は昭和11年『和漢書別置本目録』における
　書名・著者名等

後にしばし、その閲覧室で閲覧に供したこともあつた」[8]という状況であった。『東北大学五十年史』（p1681-1683）によれば、工学専門部講堂の一室を整理室として狩野文庫の整理から着手。大正10年９月武道場であった木造平屋建てを改築、図書館事務室を移したのが図書館初めての独立舎屋であった。大正11年８月法文学部が設置された（大正12年４月開講）。法文学部の図書は第二部[9]の担当である。第二部館務日誌（大正十一年八月）[10]によれば大正11年11月に狩野文庫約800部を蔵に入れている。建物はなお正規のものではなく、「図書館二部は（中略）バラツクに事務室を置き、その南に接した元解剖か何かの煉瓦倉庫を書庫とし、北側にあつた細長い旧医専の実習室を仮閲覧室に充てゝゐた」[11]。大正12年６月狩野文庫第二次受入。大正13年10月附属図書館本館書庫が竣工し、狩野文庫も新書庫に移された[12]。大正14年12月附属図書館本屋も竣工。「新築落成の祝宴が十月二十六日新事務室を会場として開催された。その後十二月下旬になつて従来の二個所のバラツクから新館へ移転を完了し、新閲覧室は翌十五年一月これを開いたが当初は土足の儘入館させず一々草履を貸したので[13]館内は清潔と静粛を保ちスチームは夜まで通したので、試験期などには全部のスタンドが煌々と輝いて繁唱〔ママ〕したものである」。[14]ここに、保存と閲覧の設備は整えられたといえる。

関東大震災と古典籍

大正12年９月の関東大震災が古典籍に与えた影響はどのようなものであったか。「学術資料（研究資源）」という性格は古典籍の一面に過ぎないが、この面から古典籍を考える場合、学術そのもの、あるいは学術の場としての大学の動向についての検討が前提になる。ここでは、東京帝国大学の状況について執筆時期や立場を異にするいくつかの記述を取り上げることによって、当時の趨勢に簡単に触れるにとどめる。

当時学生であった時枝誠記は被災典籍の救出作業にも参加しているが、震災前の国語学研究室の状況を描いているのでその部分から引用する。

> 関東大震災ですつかり焼け亡びてしまつた文学部（前の文科大学）の赤煉瓦二階建の本館は、幾多の思出を湛へたやうな古風などつちりとした建物であつた。（中略）研究室の入口では先づ靴を草履にぬぎかへねばならない。（中略）それが陰気な室の空気を弥が上にも荘重にし、樟脳の強い香が鼻をついて、国語学といふものはこれ程までに古典的な香がするものかと新入生の私は驚いた。橋本先生は当時研究室の助手として一番奥の机に席を占めて居られた。入室者には入室票が与へられて、入室の都度これを先生の側の箱の中に入れることになつてゐた。（中略）室内では高声な談話や打寛いた〔ママ〕気分を見ることが出来なかつた。（中略）このいかめしい室では周囲の書物がのしかゝつて来るやうな威圧を与へて、ゆつたりした気持ちでは、我々新入生は本が読めなかつた。（中略）大震災の直後、研究室の跡片付けに大学に通つた頃、昨日までは我々を威圧した書物が、見るかげもなく焼け出されて埃と水を浴びて放り出されてゐるのを見て、私はそれらの書物に始めて云ひ知れぬ親しさを覚えて、一冊づゝ丁寧に埃や泥を拭つてやることが出来た。人間の感情といふものは不思議なものだと思つた。
>
> 『国語研究法』時枝誠記　三省堂　昭和22年　P23－24

土足厳禁・入室票の提出・静粛などの管理状況は、研究室としては厳格かもしれないが、図書館では通常のことでもある。貴重視されている書物が人に与える重圧感が強調されているが、それにはこの文章の執筆時期が第二次大戦終戦前後であったこともいくらか関与しているのであろうか。こうした壊滅的事態への遭遇を、時枝は自著『国語学史』（岩波書店　昭和15年12月）のはしがきを再録して次のように記す。

わけても帝都を中心とした大正十二年九月の大震火災は、幾多の学問的宝庫を烏有に帰したのであるが、（引用者中略）物皆蘇るといふ気運の中で、私も亦一切の末梢的な研究を捨てて、学問上の根本問題を思索する様に駆立てられた。それは国語研究の根本に横はる「言語の本質は何か」の問題であつた。

『国語研究法』時枝誠記　三省堂　P30－31

それは性急に本質論に迫ろうとする研究態度であった。また「手近かに与へられたもの」から出発することを提唱し、テキストとして流布本を用いた学問が成立すると説く。

流布本の尊重――このことは別の言葉で云へば、手近かに与へられたものを学問の出発点とするといふことである。古典の講読に於いて、例へば源氏物語を読むといふやうな場合、原作者の自筆本とか、或はそれに近い原典を手に入れることが出来ればそれに越したことはないが、さういふものを手にすることが出来ないからとて、我々は学問に対する熱意を失つてはならない。またさういふものをテキストとすることが出来ないからとて、さういふ研究を価値低いものと考へてはならない。（中略）流布本を通して原本を推定する態度こそ、寧ろ学問の出発点なのである。

『国語研究法』時枝誠記　三省堂　P74

時枝は『定本源氏物語新解（金子元臣）』[15]や岩波文庫[16]等の活字本を源氏物語の講読などのテキストに用いていた。活字本を学術資料とするには、それに堪える活字本が相当な量刊行されること、活字本の学術的取り扱いが確立することが条件になる。ちなみに岡崎義恵（大正３年東京帝国大学入学・東北帝国大学教授）の回想によれば、大正の初め頃は図書館の木版本を学生に渡して購読の教科書として用いることもあった。そうした相違は古典籍への感覚を自ずと変えて行く。

或学年私は〔芳賀矢一〕先生の源氏物語の御講読に出席したが、学生には図書館所蔵の数部の木版本湖月抄を貸し与へられ、御自身も木版本を開いて、まるで現代の小説でも読む様にすらすらと口訳して行かれるのであつた。

「芳賀先生と私」岡崎義恵（『国語と国文学』14－４　昭和12年４月）　p225

同じく震災発生当時学生であった風巻景次郎[17]は、昭和10年に顧みて、震災以降の趨勢を次のように記している。

日本文学研究が尤に学壇時評の対象となり得る程に生長したのは、大正十二年の大震災以後のことに属してゐる。（中略）かうした寧ろ伝統的な趣味生活の根源となつてゐるものを研究対象の一部にもつ所の国文学界の動向が、低徊趣味に進み、懐古趣味に身を没して、文壇からも顧みられず、思想界からも忘れられ勝ちであつた事は、時の「いきほひ」の然らしめた所として、一応も二応も尤もな事であつたわけである。

しかし漸く時代が独自のものへの建設に進みかけてゐた事は、大震災によつて蒙つた所の日本文化の損失が、量的にも質的にも莫大なものであり、その中には取りかへしの付かぬものも多分に含まれてゐる事が分つて来た時、それに対する深く強い愛惜の情が、切々として国民の間に湧き起つた一事によつても十分察する事が出来るのであつて、それは決して一時的な馬鹿騒ぎでは無くて、全く「時」の必然であつたのである。（中略）少くも震災が契機となつて、最近の国文学研究が割に楽々とスタートした事は事実であると思ふ。

「国文学界展望」風巻景次郎（『書物展望』　５－９通巻51　書物展望社　昭和10年９月[18]）　p2-3

「時」の「いきほひ」「必然」という表現は当時その中にあった者の感じた、潮流の変化を示すものであろう。古典籍はそうした潮流の中にあった。以前は企画を立てても実現し難かった事業が次々と進められて行く、それが時にいくらか学術の傾向を歪めた面もなかったとはいえない。その反動も風巻は感じている。

とに角『校本万葉集』によつて口火を切られた所の、校本、索引、註釈、辞書等の作成、根本資料の複

製等の基礎的作業は、この十数年間、学界の最も力を入れた所であり、一時はさうした研究以外に文学研究は存しないかに考へられすらもした。（中略）満州事件以後に於いて、解釈学的立場が強く主張され出したのは、この基礎研究の行き過ぎに対する反動と見られると思ふが、

「国文学界展望」風巻景次郎　ｐ９

この文章で震災後の研究活動復興の顕著な動きとして風巻が指摘している（引用省略）雑誌『国語と国文学』創刊号には、橋本進吉が国語研究室で被災した書籍についての報告を掲載している。当時助手として、書籍の蒐集騰写に当たり保管の責任者でもあった。その厳格さは前に引用した時枝の文章にもうかがえる。

せめて焼亡書の目録を作り、委しい解題でも添へる事が出来れば贖罪の一端ともならうけれども、台帳たるカード目録も、索引カードも（書名索引、分類索引とも）貴重書の略解題も共に焼失して、（中略）それも殆不可能であるそれ故、焼失書中の特に重要なものを自分の記憶の中からよび起して目録を作り、出来るかぎり冊数刊写の年月並に特異の点を挙げる事とした。（中略）何時でも見られるといふ考から、重要なものでも手許に副本または解説を作つておかなかつたのが、今更悔まれる。

「国語研究室焼失主要書目録」橋本進吉（『国語と国文学』創刊号　大正13年５月）　p104

この目録はその後数号に亘って掲載されているが、「甲　特別書の部」「乙　普通書の部」に分けられている。一方国文学研究室の被災説明はかなり控え目なものである。

国文学研究室は国語研究室程には大震火の災害を受けなかつた。国語研究室には貴重な研究資料が堆高く積まれてゐた。（中略）図書館なくとも立派に独立し得べきものであつた。で、吾々の室はどうであつた。創立日尚ほ浅くして貧弱なものであつた。唯洒竹文庫の俳書は量に於て或は全国に冠たるものであつたかも知れぬ。然し、これとても俳書文庫として十分の価値を有たしめるには未だ甚だ遠かつた。唯幸に洒竹文庫の大多数は災害を免れた。（中略）

大災前に於て我が国文学研究室は図書館を背景として存立してゐた。それを離れて独立し得ないものであつた。（中略）それであるから図書館焼失後の我が研究室は孤児の如き惨めさが著しく眼に立つ。

「国文学研究室より」守隨憲治[19]（『国語と国文学』創刊号　大正13年５月）　p110

貴重図書を図書館で集中管理するか、研究室等で保管するか、それぞれに長短はある。国文学研究室が図書館蔵書に依存する状況にあったのは、方針ではないようだが、結果的には関東大震災の場合、どちらが貴重書の安全のためには優れているとも評価できない状態であった。

個人の蔵書は兎も角も大学図書館の蔵書の焼かれたことは何んといつても大学の手落ちである。図書館の位置が火災の原因になりやすい医科大学の薬品のあるところと接近してゐるのも宜敷くない。休日などには図書館に小使位しか居ないのも宜しくない、（その為めに今度のやうな火災にもどういふ本が貴重かゞわからず、従つて貴重な本を出すことも出来なかつたらしい。）書庫そのものゝ構造のゾンザイなのも宜敷くない。それよりももつと突き詰めたことをいへば、大学が古書を高閣に束ねるばかりで古書の覆刻を盛んにしなかつたのも宜敷くない。徒らに材料を他に示すことを惜んで竟にその材料を烏有に帰せしめた学者の罪は鼓を鳴らして攻むべきである。大野洒竹の一生の苦心に成つた洒竹文庫の焼け失せた丈けでも残念で堪らぬ。

「古書の焼失を惜しむ」芥川龍之介[20]

この批判の当否については検証の必要がある[21]。大学による復刻事業や学外者への閲覧許可状況等は簡単には評価できない。ただ、貴重図書を保管する大学に求められることの要点がこの文章には示されている。貴重図書を、万一の場合最優先で救出すべき典籍とするならば、その選定は極めて深刻なものになるはずである。そして、万一の事態が発生した場合は、不幸なしかし唯一の手掛かりとして目録が残されることもある。

特別本と別置本

昭和４年１月に狩野文庫第三次受入が行われた。昭和４年９月武内義雄（法文学部・中国哲学）館長が退任し、村岡典嗣（法文学部・日本思想史学）が館長に就任する。大正13年７月に武内は館長に就任したが、法文学部草創期に大量の図書を購入したため「莫大な負債と未整理図書を抱え」[22]その解消に追われていた。村岡の就任時にようやく「館務も一応平常化され、建設期から一歩進んで図書館の充実をめざし、躍進すべき時期に入つた」[23]と『東北大学五十年史』は書く。東北帝国大学全体としても『五十年史』が「昭和二年から本格化した不景気は六年にいたつて頂点に達し、そこで満州事変がおこり、日華事変へと転じてゆく。」としながら、「この二年から昭和十一、二年頃までの一〇年間は、東北帝国大学が、もつとも平静な日日を送り、学術の府としての業績をつみ重ねていつた」（p245）と評する「充実時代」に当たる。『五十年史』はこの時期を、財政的側面、教官の俸給・定員の増減や敷地・建築の状況などから、「相対的」には充実していたが、そうした状況が「かねて存在した東北帝国大学のやや隠遁的な学術主義を一段と助長した」（p250）と分析する（第一部通史第四編充実時代）。

昭和６年頃、附属図書館ではさまざまな企画を立てていたことが、次の書類によって確認できるが、その方向性は「充実をめざす」ものといえるであろう。

一、東北帝国大学附属図書館一覧ノ編纂発行
　学内職員学生、殊ニ新入学生ノタメ図書館利用案内タラシメ、兼テ視察参観等来客者ニ呈示セントス。（三年目毎ニ改版ノ予定）

二、稀書解説
　本館所蔵稀覯図書ニシテ学術研究上特ニ価値ニ富メルモノヲ選ビテ書寫、印刷、内容、伝来等ヲ解説シ研究者ノ便ニ供セントス。（毎年二百頁以内ノモノヲ一冊宛継続発行ノ予定）

三、和漢書目録
　狩野文庫本七万三千冊其他八万冊計十五万三千冊ノ目録編成印刷セントスルモノナリ。狩野文庫目録ヲ先ニシ三年間ノ継続事業トシテ実行セントス。

四、書庫内塵埃立チ、図書汚損ノ害尠カラザルニヨリ、各階リノリユームヲ敷キテ此ノ害ヲ予防セントス。
　費用見積価格約四千円、二ヶ年継続。

「図書館改善計画（会計課予算係員ノ要求ニヨリ同課へ提出ノ案）」昭和六年七月七日[24]

経費の見積表によれば和漢書目録は〔菊版〕1800頁・700部、稀書解説は菊版200頁・500部、図書館一覧は菊版100頁・500部印刷の計画であった。

その一方で、会計課からは、経費節減の実施についての報告を求められている（昭和六年九月十二日付・報告は九月二十二日提出）[25]。その案文によれば、附属図書館の経費節減策は、夜間閲覧室照明（利用されていない卓上電灯消灯の徹底）・嘱託員俸給・予約購読外国雑誌数・製本代単価に関するものである。事業の活発化と経費節減の均衡をどのように考えていたのか、これらの書類からは読みとれない。こうした事業は単に印刷費を得たのみでは遂行し得るものではなく、人員や調査時間費用等の確保も必要となってくるはずである。

附属図書館『予算増額要求（理由書）』（史料館所蔵　図書館/36）の綴りに、「予算増額要求案」と題された書類がある。これは、昭和二年度から昭和七年度に至る予算要求の一覧メモで、昭和二年度には「司書三名増加」昭和四年度からは「目録印刷費」が加えられている。七年度分の要求は「六年四月提出」とある（上記六年七月のものは別に請求したものか）。

昭和８年10月第十次帝国大学附属図書館協議会[26]（後述）において、東北帝国大学附属図書館か

ら「第三十題　各館蔵書目録ノ状態ニ就イテ承リタシ（東北五）」という議題を提出している。その趣旨説明として「本館蔵置ノ大部分ヲ占メテ居ル　法文学部ノ図書目録ハ全然出版セラレテ居ナイ」「全部ノ目録ヲ印刷シ度イト云フ宿望ヲ有テ居ル」と述べ、「最近狩野文庫ノ目録ヲ作リツツアルガ之ニハ特ニ人ヲ雇ハズ、館職員ヲシテ之ニ従事セシメテ居ルガ、之ガ為に事務ガ渋滞シテ困テ居ル。」と付け加えている。この段階でも狩野文庫の目録作業が負担となっていたのである。各館から状況の説明があるがいずれにしても容易ではなく、京都帝国大学からは「特別予算ガナクテハ出来ナイ事業」との発言がある。

なお「図書館改善計画」では書庫の塵埃防止のためリノリューム敷の予算を申請しているが、この問題もかなり深刻であったらしく、第十次帝国大学附属図書館協議会において東北帝国大学附属図書館から「第三十二題　書庫ノ掃除ニ就テ（東北四）」という議題を出している。コンクリート書庫の床掃除に効果的な方法がなかったようである。

計画した事業の内、稀書解説は昭和７年に『源氏物語関係書解題』（重松信弘[27]稿・東北帝国大学附属図書館刊）が「解題叢書　第一篇」として刊行されている。附属図書館としては、さらに刊行を継続する予定であったものと認められるが時代の状況もあり困難になったのであろう。蔵書目録の刊行が実現したのは、和漢書古典については『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』が完結した昭和57年３月のこととも見做される。

昭和７年『源氏物語関係書解題』には、書籍番号が示されず「貴重書」とのみ記されている蔵書が数点ある。たとえば、『源氏物語』（宇1-943　漆塗箱入）・『源氏物語註』（阿1-34　三条西実隆講公條記）・『源氏小鏡』（阿6-125　慶長活字本）などである。昭和11年『別置本目録』収載書でも、「源氏小鏡」（阿11-149　活字本）には書籍番号[28]が示されている。この時点では貴重図書とされていなかったか、あるいは受入作業の手順として既に書籍番号が付与されていたのでそれを明示し、始めから貴重図書として扱われた図書は番号の付与が遅れていたため「貴重書」と表示したとも考えられる。

２点の『源氏小鏡』はともに狩野文庫由来であるが、前者が開学展示の目録に含まれているものと推定される。事務用カード目録を見ると、前者は青色のカードで「別置」の印があり、後者は白色の一般的なカードに「特別」「別置」の印がある。また隅には素早く記したらしい筆致で「特」の字が鉛筆で書き込まれている。白色のカードに記された「特」の字は、特別本（候補）選定作業の痕跡と考えられる。「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮[29]（『MAUL　宮城県大学図書舘協会会報』27　1966年）に関連すると思われる記述がある。

「狩野本整理日記、昭和七年七月十六日ヨリ認ム」と第１行にかいてある洋半罫紙１枚がある。本学の用紙に池田氏[30]のメモのようである。即ち「昭和七年七月十日頃ヨリ図書館長狩野本巻子本ヲ調べラレ十四日頃に終ル。不明ノモノ十四部程アリ。特別書ニハカードニ特ノ字ヲカカル、直チニ特別書ノ目録中ニ書キ加フ。七月十五日巻子本ノカード複製ヲ始ム、途中貴重本ヲ調べラルル手助ヲス。七月十八日巻子本ノカード複製ヲ終ル。七月二十日館長不明ナリシ巻子本14部ヲ五階ノ棚ノ後ニ於テ発見サル。ヨツテ直チニ特別本ノ記入カードノ複製ヲナス。　p４

ついで４月には整理案ができ、館長から全員に説明された。其は謄写版で４頁の「狩野文庫整理案。昭和八年四月二十日定」。内容は「（中略）貴重本及ビ特別本ノ取扱。一．貴重本ヲ普通本ニ繰入レテ分類シ普通本ト共ニ通シ番号ヲ打ツコト。三．〔ママ〕貴重本ヲ改選シテ別置スルコト。四．特別本ヲ設ケルコト」となつている。　p４－５

開学記念に展示された書籍は、現在の事務用カードでは全て青色のものが使用されている。カードの右下部分には「特？」「？」などの鉛筆の書き込みが見られる。この位置に「○」が記

されているもの、無印のものもある。もし「特？」「？」が「別置本（貴重書）ではなく、特別本でよいのではないか？」の意味であるとすれば、「○」は「別置本（貴重書）でよい」ということであったのかもしれない。これも村岡館長の選別作業の痕跡であろうか。しかし、これらの典籍はその後も全て別置本（貴重図書）として扱われ続けている。

付表にこの印の有無種類を示した。点数の数え方にもよるが、「特？」「？」の印のあるものは約三分の一である。それは精査の結果としての再選別ではなく、貴重書を別置本と特別本の二段階としその取り扱いも別にすることを考えた場合、特別本の扱いが適当と判断されたものではないかと思われるが、これは推測である。付表に示したものは痕跡に過ぎない。ここで問題とするのは、それらが示す結論ではなく、経緯である。別置本を絞り込むことが検討されたにもかかわらず、結果的には選定者にとっても曖昧さを多分に含んだ基準で別置本が決められた可能性がある。そして、同様のことは特別本と普通書の間にも認められるが、これは別稿において検討することにしたい。

昭和８年10月第十次帝国大学附属図書館協議会[31]が、東北帝国大学を会場として開催された。この時、附属図書館本館の所蔵する明治以前日本人編著の書目書志の展観を行っている[32]。東北帝大が当番校であったためか議事録の原稿・草案も共に保管されている[33]。

議事録には当日の議題が提出館名とともに記され、貴重図書の選定基準に関しては、「第三十五題　貴重図書選定ニ就テ特別ノ標準アラバ承リタシ（東京　追一）」が提出されている。東京帝大の趣旨説明では「刊年ノ比較的新シイ高価本ヲ貴重図書ト成ス大体ノ標準ヲ伺イ度イ」とのことであるが、議事録で選定基準が具体的に記述されているのは京都帝国大学附属図書館のものである。「第二次協議会〔大正14年５月開催〕ニ於テ、私ノ方カラ此議案ヲ出シタ。其際ノ決議ハ更ニ考究ノ上、他日具体案ヲ作製スルト云フ事デアツタ。今司書官ガ大体ノ事ヲ覚書ト成シテ、私ノ手許ニ出シタモノヲ読上ゲル。」と前置きして、全般にわたる選定基準を示している。東北帝大は「京都ト大同デアル。」という簡単な回答になっている。この議題に備えたものらしい手書きのメモも残されている[34]が、意外に簡略で

東北大

貴重書ノ標準トシテハ「現在」大体左ノ如キ標準ニシテ別置シ置ク。（狩野文庫）

イ、宋元版　慶長以前ノ刊本

ロ、名家書入本

ハ、稀覯本

等トシ

風俗ニ関スル秘本等ハ「特別書」トシテ別置

と、あるのみである。これでは説明不足と思われたのか、座長が発言を追加している。

座長　東北側トシテ一言補足スル。コノ問題ハ目下狩野文庫ノ整理ト共ニ、一定ノ方針ヲ考究中デアル。ソノ大体ノ腹案ハ、マヅ所謂貴重本（大体京都側デ述ベラレタ如キ類ヒ）ヲヤヽ広イ範囲デ採リ出シテ、特別扱図書トシ、サラニソノウチカラ保管上ソノ必要アルモノヲ別置シ、別置書中更ニ特別ノ用意ヲ要スルモノヲ貴重書トスル、而シテ、ソレソレ閲覧貸出ソノ他ニ別ニ規定ヲ設ケルツモリデアル。決定ノ上ハ詳細御知シテ御意見ヲ伺ヒ度イト思ツテヰル。

これにつづけて、京都帝大が発言している。

京都　貴重書ト云フ文字ニ囚ハレテ、困ル事ガ起ルカラ、特別書ト成スノガ適当デアルト思ハレル。而シテ図書其者カラデナク由緒等ニ因ルモノハ準貴重書ト成シ度イト考ヘル。例ヘバ甲乙丙ニ分ケ――甲

類ハ絶対ニ貸出サヌ事、乙類ハ教官自身、或ハ其他教授上使用スル場合ハ条件ヲ付シ、研究用トシテ貸出得ル事、丙類ハ前者ニ比シ取扱ヲ少シ簡単ニ為ル事ニ致シテハト思フ。要スルニ貸出ヲ主トシテ絶対性、相対性ノ認定ヲ為シ度イ。久原文庫、近衛文庫等ハ寄託書デアル性質上重ク扱ヒ、治安上、思想風俗上考慮スベキモノ、軍機ノ秘密地図等ハ特別扱ト成シテ居ル。一括シテ厳重ナルモノ、準ズルモノ、比較的簡易ニ為ルモノト分ケテハト思テ居ル。

「特別書（本）」という名称は「貴重書（本）」よりも多様な意味を持たことができる。由来に特別な事情のあるもの、「治安上、思想風俗上考慮スベキモノ」（東北帝大では「秘本」と称する類）や刊年は古くはないが高価な限定本など「貴重」とはいえないが普通書扱いは躊躇される書籍も含み得るようにした方が、管理上の便宜があったものと思われる。東北帝大附属図書館の特別本は近代の精巧な複製本なども指定している。

またこの協議会に東北帝大から「第三十四題　蔵書ノ国宝指定ニ就テ（東北三）」という議題を提出している。「協議ヲ目的トスルニモアラズ、又敢ヘテ各館ノ賛成ヲ求ムルニモアラズ、単ニ当館ノ経験セシトコロトシテ報告スルニ止ル」という前置きで趣旨ははかりがたい。

昨年末〔昭和７年〕当局ヨリ、国宝指定ノ為調査シタイ故三十日間借出シタケレバ送付アリタシトノ紹介〔ママ〕アリシモ、該書ハ本館ニテ最貴重書トシテ取扱ヒヲスルモノニ属シ、国家ノ典籍保存ノ趣旨上、館外貸出ハ為サザル方針ニテ管理シヲル故折角ナガラ要求ニ副ヒカタキ旨ヲ答ヘタル事ニツイテ述べ、ツヅイテ各館ノ間ニコノ種ノ経験ノ有無、ソノ他ニツキ懇談シ合ヒタリ。

これに関連するものとして「昭和七年十一月八日　〔史記借用謝絶文〕案　（写シ）」[35]が残されている。「昭和七年十一月九日」付文部省宗教局長宛附属図書館長（村岡典嗣）の書類案文で、内容は協議会での発言と同様である。東北帝国大学保管の史記孝文本紀第十及び類聚国史巻第廿五が（旧）国宝に指定されたのは昭和16年７月である[36]。

前に引用した座長発言で、別置書からさらに貴重書を選定することが述べられているが、昭和11年刊行『別置本目録』には「貴重本」の項目があり、後の国宝２点と「聖徳太子伝暦」がこれに分類されている。「狩野文庫について」村岡典嗣（昭和十二年十月）には「相応に厳密なる意味で、貴重本と称しうべきものも少くない」[37]として「貴重本」に分類された三点を挙げている。この段階では「貴重本（書）」は限定的な資料にのみ用いられる語であった。

昭和10年には選定された特別本・別置本の手書の目録『狩野文庫別置本目録』（昭和十年四月十五日[38]）・『狩野文庫特別本目録』（昭和拾年参月弐拾弐日）・『和漢書別置本及特別本目録（狩野文庫外）』（昭和十年三月廿五日）が作成されており、これらの目録では「古写本」「古刊本」等の分類がなされ貴重図書目録としての体裁が整えられている。

附属図書館の利用案内『閲覧の栞』（自昭和十年至昭和十一年　東北帝国大学附属図書館）第二篇第三章特別本　には次のように記されている。別置本を「第一特別本」、特別本を「第二特別本」と称している。

本館所蔵図書の中、特別の取扱を要するものを特別本として之を普通の蔵書と区別する。

第一節　和漢書特別本

和漢書の特別本は狩野文庫を始め、其他の和漢書（古典及新書）から選出し夫々之を第一特別本と第二特別本との二種に分つ。

第一特別本（別置本）

第一特別本は図書の表紙及び閲覧カードに別置の記号を付し、その閲覧は特別の規定に従ふ。現在狩野文庫から五六四部、其他から九七部を挙げ、夫々左記の表の如く分類し、別の書棚に蔵めてある。

〔分類表・略〕

第二特別本

第二特別本は図書の表紙及び閲覧カードに特別の記号を付し、其閲覧は特別の規定によるが、分類は普通の図書に等しく、現在狩野文庫に一、三〇九部、其他に九七部ある。

また「閲覧細則」に「五、特別本ノ借覧ハ、特別閲覧席ニ於テ、之ヲ為スモノトス。」(p60) とある。『閲覧の栞』からは具体的な利用条件は知ることはできないが、別置本・特別本に関する制度も次第に整えられていったものと思われる。『閲覧の栞』の「自昭和十年至昭和十一年」版と「自昭和十二年至昭和十三年」版では文章に小異がある。第一特別本の数は、「自昭和十二年至昭和十三年」版では「現在狩野文庫から五六五部（甲）、其他から八八部（乙）」となり昭和11年『別置本目録』の点数と一致する。「自昭和十年至昭和十一年」版の第一特別本の内容は、昭和10年の手書目録に近いものと思われる。「狩野文庫以外」の点数がかなり減少しているが、数点を特別本としたこと、昭和10年目録では別置本目録に収載している西鶴本複製を除外したこと（昭和36年度版別置本目録には収載）などによると推測される。とすれば、目録刊行の直前に別置本をいくらか絞り込んだことになる。狩野文庫にも資料の入替がある。

その頃、狩野文庫蔵書の塵埃除去作業が行われている。

昭和10年頃か、人夫３人位に狩野本のほこりを叩いてもらつた。多分７月頃のある３日間位だつたと思うが、適当に図書をくくつて、書庫屋上にもち出して行つた。納庫以来のほこりであつた。

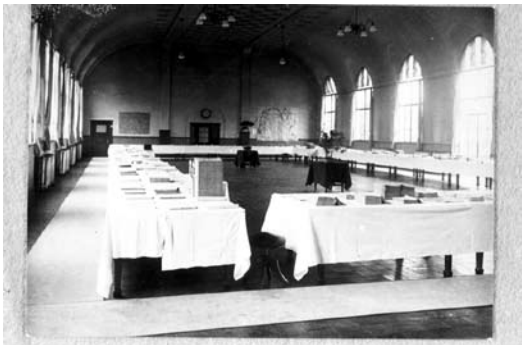
「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮（『MAUL　宮城県大学図書館協会会報』27　1966年）　p３

『閲覧の栞』（第二篇蔵書第二章特別文庫第一節第一特殊文庫―狩野文庫）には、「本文庫の整理は今や漸く完了に近付き、その目録もやがて作られる筈であるが、目下は大正三年に出来た冊子式仮目録を閲覧室に備へて検索用に供してゐる。」とある。狩野文庫は再編成したため函架番号ラベルの貼り直し作業が行われ、昭和12年11月村岡館長退任時で「ラベルを張りおえたのは一門の半分位であつたと思う」[39]という状態であった。入庫検索ができない利用者には、狩野文庫は利用しにくいものではなかったかと思われる。

創立二十五周年貴重図書展示と昭和１１年別置本目録編集印刷の経緯

昭和11年10月17日東北帝国大学は創立二十五周年記念式を挙行した。なお、平成19年を東北大学創立百周年とするのは、明治40年から数えている。その事情を『東北大学五十年史』は「当時の大学当事者たちは名目上の設置よりも理科大学の開学をとくに重視し、満年令で数えて、創立三〇年といわず、創立二五周年といつた。五〇年記念の今日より数えればちようど二一年のむかしである」（第一部第四編第四章第四節　創立二五周年記念式典）と説明する。

附属図書館では閲覧室（現在の東北大学史料館２階）を会場として貴重書の展示を行った。地元紙・河北新報は比較的詳細な記事を掲載している[40]が、展示資料の紹介は仙台関係がその多くを占める。末尾に「因に十八日の来場者は靴又は草履が便である」とあるのは、下駄履での入場を認めなかったのであろう。展観会場設営準備のメモ「展観会場設備費概算調」[41]には、「呉座　四五間」「草履　二〇〇足〔「一〇〇足」を修正〕」の記述がみられ、「本学創立二十五周年



展示会場写真（史料館所蔵）

記念本館公開要項」[42]には、「公開範囲」として招待者のほか、一般を対象としている。会場準備のメモには莫蓙の敷き方の図もある。会場の写真を見ると、莫蓙らしいものが図書を展示した机の周りに敷かれている（床の損傷を防ぐためか）。当時の展示は布を掛けた机に多数の典籍をただならべ広げたもので、今となっては一般公開の展示では見られない「壮観」である。展示されたのは貴重図書の内375点で、写本を中心としたのは、昭和６年８月に明治以前刊本展観（324点）[43]を行ったためか。『東北帝国大学二十五周年記念　展観目録』凡例（昭和十一年十月一日）には「本目録は本館にて近く出版せる和漢書別置本目録によりて適宜編制せるものなり」とあって、別置本目録の縮約版のようなものになっている。

昭和10年４月には手書の目録が整理されているから『別置本目録』刊行は滞りなく行われるように思われるが、その編纂印刷過程は複雑なものとなった。これは、矢島玄亮氏「愚得録（五）」（『東北地区　大学図書館協議会誌』　第９号　昭和34年10月）の「（１）２種６類の「東北帝国大学附属図書館和漢書別置本目録・未定稿」について」に詳述されている。矢島氏も全ての過程には関与しておらず、心覚えのような性質の文章でもあり、当時の事情に通じている者でなければ理解し難いところもあるが、以下は主に矢島氏の記述によって整理する。

「２種」とは、昭和11年８月刊、同年10月刊、10月刊はさらに５類に分かれる。８月刊目録を矢島氏は第１種本と称し「第１種本は筆者の手許に２部あるだけで他には全くないはず。」と記す。同氏の別の文章では「この２冊は私の訂正本と此を写した一本で、共に本館へ残してある」[44]とあるが、現在８月刊目録は附属図書館事務（表紙に「矢島」の印がある）で１冊、東北大学史料館で１冊が保管されている。この８月刊目録には多くの書き込みがなされている。附属図書館所蔵本には著者の略歴なども記され、鉛筆で書き込みを行った上から万年筆で書き直した部分も多い。史料館蔵本はやや書き込みは少なく、狩野文庫以外についてはほとんど書き込みがない。矢島氏によれば、８月に印刷所から届けられた見本の目録に少なからぬ誤りが発見されたため、これを原稿として修正を加え印刷し直すことになった、訂正した２冊を印刷所に戻し２冊が矢島氏の手許に残った[45]、それが上記の書き込み本ということになる。

「愚得録（五）」の記述を抄出する。「初め300部印刷の予定で、200部を印刷製本した時この見本を呈出したので、印刷所には其儘にしておくよう命じたという」。そして、「訂正増補（組版を動かさないように）の結果ひどく誤があって正誤表だけですませられない頁は、その頁全部を刷り代へ、正誤表で間に合う頁はそのままとして後に正誤表をつけることとし、なお本文と索引の正誤表と人名追加を加へて、既に印刷した200部をこの方法で再装し刊記を10月にかへた（C・D・E本）別に新原稿によって300部を印刷したというがこの分には正誤表はつけない（A・B）」という処置をとることにした。

矢島氏は10月刊の５種類をＡ本～Ｅ本と称する。ＢはＡの特製本で「クロース厚表紙」、ＣはＤの「スフ表紙特製本」、これに相当すると思われる目録は黒い布の表紙のものである。「B、Ｃは総長、学部長、館用等にしたもので作製部数も10部内外」、ＥはＤに１枚おきに白紙を綴込んだ（書込のためか）ものであり、「Ｅは殆んど事務用に回したらしく、その部数も不明であるが、これは殆んど館外には出なかったと思う」と記す。

Ｃ・Ｄ・Ｅ本は同じ内容で装丁が異なるだけであり、これらには、末尾に正誤表がある。新たに修正した内容で印刷し直したのがＡ・Ｂ本であり、したがって正誤表はない（ただし、矢島氏は「ABの中百部はＣと同内容か」とする）。

配布については「和漢書別置本目録未定稿配付表　昭和11年10月15日」等[46]によってその詳細を知ることができる。中には枠外に「〇訂正普　△正誤表　クロース△正誤上」のメモを記し、配布先名の上部にこれらの印があるのは、送るべき目録の種類を仕分けしたものか。

矢島氏は目録の編纂過程については次のように記す。

> 原稿――原稿としたカードは別置してあり、またどの点で別置扱となったかは明らかでない。そのうち秘本は風俗上の理由で別置扱としたので、他は旧蔵者の目録から引きついだものが大半のようである。これらの現品はもちろん、カードさへ館長室にあったらしい。ただ先輩 TK 氏は誰よりもよく知っていた。本目録の構想や作製計画は氏の意見が力あったものであろう。（中略）原稿はこのカードによって命ぜられたまま筆者らが忠実に原稿紙へ引写したのである。（中略・印刷見本届く）館長室で相談が始った。（中略・修正すべき箇所の指摘）でなければならない、私は実物をみていないのでとの筆者の言に TK 氏が室内にあった訪書餘録を見るとその言の如くであった。相談の結果はこの見本刷を原稿として再製することとなった。いよいよ現品にも当り誤は正し、補すべきは書入れることとなったが、（以下略）
>
> 「愚得録　（五）」矢島玄亮　　p4-5

「実物をみていない」との矢島氏の発言に対し、『訪書餘録〔和田維四郎著〕』が取り出されている。当時の仙台でわずかな参考文献によって古典籍の目録を作成するのは、想像以上の困難を伴ったことであろう。目録の記述内容の作成過程は矢島氏の文章によっても明らかではない。目録修正に至った経緯について別の文章では矢島氏は「〔同僚が〕私宅を訪問され、目録の誤を徹底的に訂正しようと相談されたので、再調査に踏出したが、８月から10月迄の間では全く内容まで立ち入ることはできなかつた」[47]とする。８月版目録の書き込みは、誤脱の修正・情報の追加のほか記述方針の相違による変更や活字の字体の修正も少なくない。それらはむしろ目録記述法の変遷や活字印刷史の方面から検討すべきことでもあろう。

昭和11年８月版『和漢書別置本目録』「はしがき」（昭和十一年七月）には「しばらく未定稿とし、なほ修正を加ふるを得て、一層の完成を期せむとす。」とあり、増訂は当初から見込まれたものであった。狩野氏の開学記念展示にあたっての貴重図書選定及び札の作成、創立二十五周年の際の『別置本目録』の修訂は短期間で行われた。目録さえ整わない多数の典籍から特別本・別置本を選定するのは容易ではない。問題は別置本の選定理由が目録作製者にも伝わっていなかったらしいことである。矢島氏は「中には何のために撰ばれたか、これなら特別本の方が、普通本の中にもあるではないかと幾度か首をかしげたものもあった。」[48]という。そして選定段階での迷いは、カードに痕跡として残されている。

昭和12年11月村岡典嗣館長は退任し石原謙館長（法文学部・哲学）が就任する。矢島氏によれば、村岡館長は狩野文庫整理に関する引継事項をタイプ印刷して配布しておいたが、「狩野文庫概説が発行されたので、整理は完了したかの印象を与えた」[49]。課題の継承が困難になる状況もあったのであろうか。後に矢島氏がさらに訂正した増補版が洋書の目録をあわせて昭和36年度版『東北大学附属図書館別置本目録　増訂稿』として刊行されることになる[50]。これらについては稿を改めることとしたい。

※引用にあたって、原文の漢字の字体・活字の書体を改め、傍線・ふりがな等は省略した場合がある。また「,」「.」は「、」「。」等に改めた場合がある。〔　〕内は筆者の推定による補記である。文献の刊行年は原則として奥付等に従い、西暦・元号の統一はしていない。付表の古典籍の漢字はなるべく原文に近いものとした。

注

1　「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（その一）　－昭和11年版『和漢書別置本目録未定稿』の刊行－」 東北大学附属図書館報『木這子』第32巻第１号（通巻118号）平成19年６月
2　『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館編　昭和36年　p242
3　往復文書　（東北大学史料館所蔵　図書館 /02）の内。以下東北大学史料館は史料館と略す。
4　狩野氏は「カード」と称しているが、図書館のカード目録と区別するため、「札」と呼んでおく。
5　本学創立二十五周年本館公開関係（史料館所蔵　図書館 /46/２）に含まれる「展観会場設備費概算調」には 「展観題箋〔ママ〕　五〇〇枚」の記述があり、この展示の際にも改めて札を作製したものと思われる。
6　『狩野文庫概説』東北帝国大学附属図書館　昭和12年11月　所載
7　「狩野文庫について」P15
8　「狩野文庫について」P16
9　なお、新築図書館への移転の頃、第一部・第二部は合併している（『東北大学五十年史』p1686）。
10　第二部館務日誌　（史料館所蔵　図書館 /13）
11　「大学図書館の三十年（二）」伊木武雄（『同心』２　東北大学附属図書館同心編集部　昭和24年８月）ｐ６　東北大学五十年史　p1683　によれば第二部は、「元医学専門部の組織実験室であつた建物を閲覧室とし、標本倉庫を臨時の書庫にあてて、その中間に木造平屋建の事務室を急造した。」
12　第二部館務日誌　（史料館所蔵　図書館 /13）
13　『閲覧の栞』（自昭和十二年至昭和十三年）　第二章第三節　入退館の注意　には、「一　履物　各自の下履にて入館すること、及び、備付の上草履の儘外出することは、共に厳禁。」とある。
14　「大学図書館の三十年（二）」伊木武雄（『同心』２　東北大学附属図書館同心編集部　昭和24年８月）ｐ７
15　『国語研究法』時枝誠記　P72参照
16　「時枝先生の思い出」大岩正仲「連年の中古語研究で源氏物語を、（中略）岩波文庫でお読み下さつたのとが印象に残つている。」（『国語と国文学』東京大学国語国文学会 45－２　昭和43年２月　p123）
17　東京帝国大学　昭和15年３卒業
18　風巻景次郎全集　第１巻　桜楓社　昭和44年６月　所収
19　当時東京帝国大学副手
20　芥川龍之介全集　第十巻　岩波書店　1996年８月　p155-156（初出　『婦人公論』８－11　大正12年10月）　芥川は大正５年７月東京帝国大学卒
21　洒竹文庫の焼失については、『東京大學百年史』（東京大学百年史編集委員会編　部局史 1 東京大学出版会 昭和61年）が「事実は国文研究室副手であった萩原芳之助（俳号蘿月）の働きによって洒竹文庫本の大半は焼失を免れたのである。」（第二編　文学部 p717-718）としている。
22　『東北大学五十年史』　p1686
23　『東北大学五十年史』　p1694
24　報告書類（史料館所蔵　図書館 /33）の内
25　報告書類（史料館所蔵　図書館 /33）の内
26　以下の記述は『第十次　帝国大学附属図書館協議会議事録』による。
27　昭和２年３月東北帝国大学法文学部（日本思想史）卒。建国大学教授・愛媛大学教授等歴任。『源氏物語研究史』（刀江書院　昭和12年）等の著述がある。『源氏物語の探究』重松信弘博士頌寿会編　風間書房　昭和49年　参照。
28　本解題の狩野文庫書籍番号は現在の番号とは異なっている。
29　矢島玄亮氏については『図書館学研究報告』創刊号（吉岡・矢島両氏功績記念号）東北大学附属図書館　昭和43年９月　参照。
30　矢島氏の記述（ｐ３）によれば、池田氏は池田（中川）孝氏、後に東北薬科大学教授。
31　帝国大学附属図書館協議会の概要については「帝国大学附属図書館協議会の活動」阪田蓉子（『図書館学

会年報』33－３　日本図書館情報学会　1987年９月）　参照。

32 『昭和八年十月　書目書志　展観目録』東北帝国大学附属図書館　が刊行されている。

33 帝国大学図書館協議会議事録原稿（第十次）図書館 /29/03/３・帝国大学図書館協議会議事録草案（第十次）図書館 /29/03/４・帝国大学図書館協議会議事録（第十次）図書館 /29/03/５　　史料館所蔵

34 帝国大学図書館協議会資料（第十次）史料館所蔵　図書館 /29/03/１　　この中には「第十次　帝国大学図書館協議会　昭和八年九月末日　村岡典嗣」と書かれた茶封筒が含まれている。

35 帝国大学図書館協議会資料（第十次）　図書館 /29/03/１　の内

36 毛利家所蔵史記呂后本紀第九は昭和６年12月国宝指定。前田家所蔵類聚国史巻第百六十五・第百七十一・第百七十七・第百七十九は昭和11年５月国宝指定。

37 『狩野文庫概説』東北帝国大学附属図書館　　昭和12年11月　p12

38 目録末尾に記された日付。以下も同じ。附属図書館事務保管。なお、これ以前の作成と推定される『狩野文庫別置本仮目録』（東北帝国大学附属図書館編　謄写版　附属図書館事務保管）が保管されている。実際には狩野文庫以外を含む241点の書名と冊数のみの略目録。分類ではなく「第一箱　　第一棚」のように示され、配架状態による配列と思われる。

39 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　ｐ７

40 「慶祝・けふ東北帝大創立廿五周年　　門外不出の貴重本四百点始めて公開　東北帝大図書館今明日開扉壮観！和漢書稀観本展観」河北新報　　昭和11年10月17日　仙台市内版

41 『本学創立二十五周年本館公開関係』（史料館蔵　図書館 /46/２）の内

42 『本学創立二十五周年本館公開関係』（史料館蔵　図書館 /46/２）の内

43 『昭和六年八月　明治以前　刊本展観目録』東北帝国大学附属図書館　が刊行されている。

44 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮（『MAUL　宮城県大学図書舘協会会報』27　1966年）p12

45 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　p12

46 ［和漢書別置本目録配布関係資料］　史料館所蔵　図書館 /25/４

47 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　p12

48 「愚得録　（五）」ｐ５

49 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　ｐ７

50 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　p13－　なお、昭和18年狩野文庫第二期本受入が行われている。